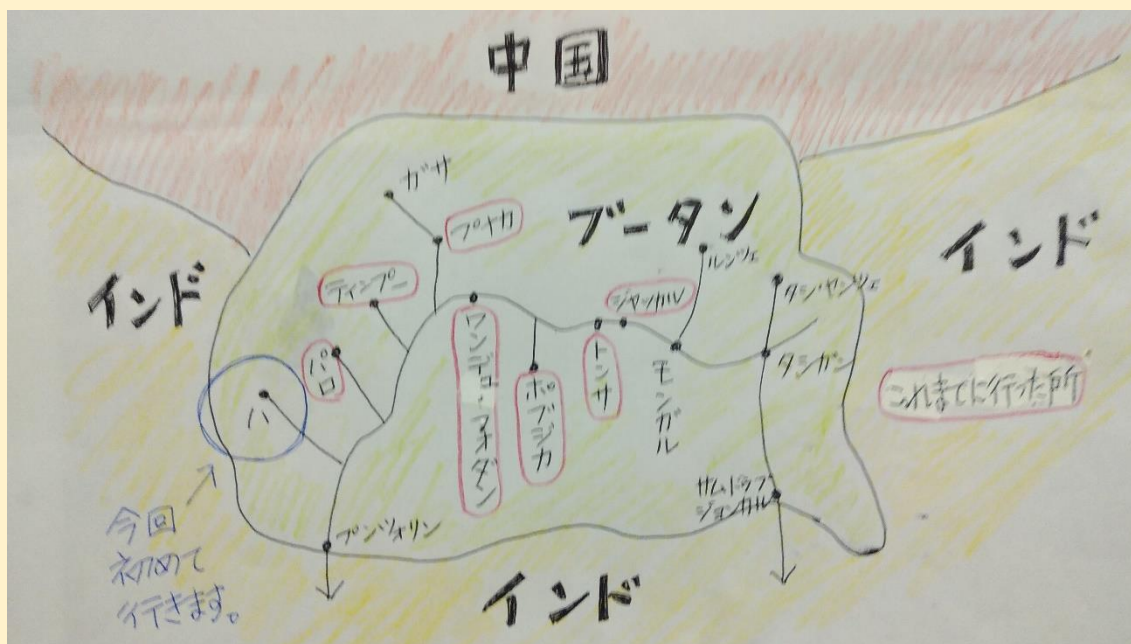


## 第4回ブータン旅行 (2017年4月28日～5月3日)



本当は前年消化不良に終わったサンティアゴ・デ・コンポステーラのリベンジにスペインに行きたいところだった。でも二年続けて長期間家を空けるのは気が引けるので今年はまだブータンに「つなぎ」の旅である。今回はブータンの最西部にある「ハ」という町に行く。

4月28日(金)

今回もいろいろあったが、やれやれ、予定通りに出発できた。

家を出たのが午後六時五十分、そして八時三十分頃品川の「アンナ・ミラーズ」で食事。このごろは外国人客もよく来るようだ。今日はスピナッツ(ほうれん草)とケールのキッシュのセットにした。お手軽な値段のセットメニューはそんなに多くない。荷物はコインロッカーに入れようと思ったが空いていなかったので仕方なく店に持ち込む。でもカウンター席に案内され「荷物は隣の椅子にどうぞ」と言われた。よかった！カウンター席でも客をぎっしり詰め込んだりはしないのだ。

そのあとは浜松町まで戻りモノレールで羽田へ。9:38着。すぐにタイ航空のカウンターに並ぶが自分の番が来るまでに四十分かかる。そして席は真ん中しかないと言われる。嫌だが仕方がない。42のF。本当に機体の真ん中あたりである。横に10席が並んでいて通路二本に挟まれた真ん中の区域の4席並んでいる部分の左から三番目。それでもまあまあ

断片的に眠れたようだ。カルバドスのチョコレートを食べたのでそのアルコールが効いたのかもしれない。そのチョコレート、機内が暖かかったのでそのうち溶けてしまった。また涼しいところに行くまで潰れないようにそっとしておく。

機内食は12:30過ぎ。夜食にサンドイッチとジュース。これはとても美味しかった。朝食は3:30過ぎ。焼きそばその他。美味しかったけどこのあたりから食べきれなくてテイクアウトするものが増えて大変になってくる。

4月29日（土）

タイ、バンコクのスワンナプーム国際空港に着いたが乗り換えで進む方向が分かりにくくモタモタする。何度来てもわかりにくい。お陰で殆ど時間が余らなくてすむ。ドゥク・エアー（ブータン航空）搭乗はバスで移動である。席は22Cで一番後ろの通路側。タイ航空機のような巨大な機体ではなく通路は一本でその両側に3席ずつである。機内は新幹線の車両一つ分くらいの広さであるが、でも手荷物を座席の上の荷物入れに入れようとしたが満杯で入らず足元に置いておいたので自分だけではなく隣の方々の出入りの度に差支えが出てご迷惑をかけて申し訳なかった。昼食（朝食か？）はベジタブルライスその他。野菜カレーといった感じの物だった。

インドのコルカタ経由だったので目的地のパロに着く一時間くらい前に一度着陸する。そしていよいよブータンのパロ空港に10:10到着。だが降りる間際にランチボックスが出た。これが昼食か？そんなにサービスしてくれなくてもいいのに。動きにくいのに、大変、大変。私は最後列の通路側の席だったので後ろの出口から先頭で降りてしまった。（ファーストクラスの方々などは前の出口から降りるのである。



パロ空港に到着すると空港の建物の外に国王ご一家の写真パネルが掲げられている。

空港の建物のあちこちが新しくなっている。私は今回は荷物が少ないので全部機内持ち込みにした。だから荷物が出てくるのを待っている必要がない。でもパスポートチェックを済ませた後外貨両替をする場所がなかなかわからなかった。空港が広いわけじゃないし初めてではないのになぜかと言うと案内表示がわかりにくいからだ。例えば大きめのスーパーの食品売り場と同じフロアにクリーニング店があるはずなんだが目立たない場所にあってなかなか見つからない、みたいな感じである。

やっと両替を済ませて空港を出るとガイドさんたちが私を見つけて駆け寄って来る。車はワゴン車である。私一人なのに勿体ないなあ。

ガイドはカルマ氏、運転手はワンチュク氏という。どちらも日本語が少し話せる。それじゃあ彼らのために私も日本語でいこうか。(その方が楽しし...) ちなみにこのカルマ氏、後日テレビでブータンのことを放映した番組に出ていらした。

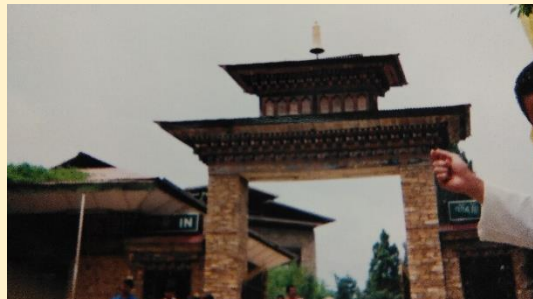
まずパロの博物館を見学に行く。インド人客が沢山来ていた。建物も素敵で内容も素晴らしく、今まで見た中で最高の博物館だった。勿論他国にはもっと規模の大きい展示物の物量も比べ物にならないほど多い博物館は数限りなくあるであろうが、この博物館は決して大きいというわけではないがなぜか落ち着いた気分で飽きずに見学でき、また来てみたいなあと思ってしまうようなところだったのである。(二年前にトゥロンサで見学した小さいタワー状の博物館もそうであった。) 数々のお面やそれをつけて踊る祭りのダンスの映像... 踊るのはみなお坊さんたちなのだそう。それから多種の動物たち、植物たち、剥製、写真、図表、大きな美しい写真パネル... 日本で、どこかの博物館でこれだけの展示があっただろうか? いや、私が博物館などにはめったに行かないから知らないだけなんだろうけれどもそれでもなぜだかこんなに私の心を捉えた博物館(展示会、と言ってもいいくらいの規模

にすぎなかったかもしれないが) はこれまでになかったように思う。

しかしこの博物館は実は仮の場所なのだそうで、本来の博物館は少し先の場所にあつてただ今改装工事中ということであった。



博物館のそばの階段。何だか気に入った。



博物館の門。右にガイドさんがいる。



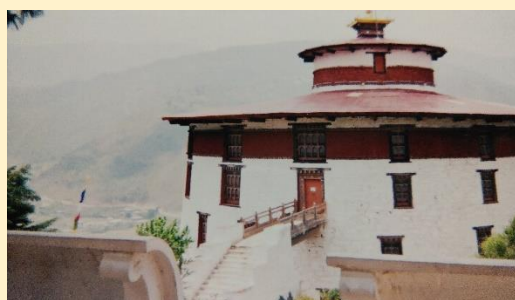
ロバに乗ったり荷物を運んだりする人たちがいる。



博物館の外壁



周辺の風景



実はこちらが本来の博物館でただ今改装中

それと地元の小中学生が見学に来ている姿が可愛らしかった。授業の一環として団体で来ているのではなくて数人のグループのようなので放課後なのか、それとも休日なのか？ゴヤキラの制服姿だが、ブータンでは子供といえども休日といえどもこのような公共の場所に出入りする時には T シャツ、ジーンズのようなものは不可でゴヤキラを着用しなくてはならない。しかしキラ（スカート）の部分には制服でもテュゴ（上着）の部分は色とりどりの私服という子もいた。



ゴヤキラというものは日本の数十年以上前の普段着の着物に雰囲気が似ている。緋や縞や銘仙の着物に袴をつけたりつけなかったりして学校に通っていた百年くらい前の日本の小学生、中学生、女学生・・・そういう雰囲気なのである。とても可愛い。

チャロ・レストランという店がある。チャロ・ベーカリーというパン屋が同じ建物の一階にあるのだが、そのレストランで昼食をいただく。ちなみにそこに行くことになったのは多分私が事前に「チャロ・ベーカリー」というパン屋さんがあるのを知って、ブータンのパン屋さんとはいったいどんな感じのものであろうかと興味を持ち、行ってみたいと申し入れてあったからであろうと思う。「チャロ」というのはゾンカ語で「友達」の意味) レストランの食事は普通のメニューであり、パンに関係したものではなかったが美味しかった。

レストランには他に中国人二人の客とガイドさんがいた。ガイドさんは中国語で話していた。ブータンの観光業界（といっても半分国営のようなものだが）キメの細かいサービスを目指して日々精進を怠らないようである。

ガイドさんたちは別室で食事をしたようである。基本的に客とは同席しないことになっているとのことだが、ブータン人は激辛（外国人にとっては）なものでなくては食べた気がしないそうであるからお互いにその方が都合がいいだろう。





チャロレストランとベーカリーとその周辺。右下の建物はブータンテレコム株式会社。

私はわりとすぐに食べ終わって外でガイドさんたちの出てくるのを待っていた。写真を撮ったり野良犬の相手をしたりしながら。もうおなかが一杯なのでベーカリーで何かを買おうという気は起こらず（余計な食べ物を抱え込むと荷物になって困る）外から眺めて終わりにした。「チャロ・ベーカリー」は小さなケーキ屋さんだった。日本人から見ると品ぞろえはチョコチョコで「なんだ・・・」という感じだがブータン人にとっては楽しい店だろう。四、五歳の女の子と母親らしい女性が買い物に来ていた。女の子は私のことを怪訝そうに見ていた。パンなんて扱ってなさそうじゃん？と思っていたらその店から食パン（三斤分くらいだが小さめ）を十本くらい抱えて出てきて車に乗せて運んで行く男性を見た。

茶色い犬が一匹、せつなそうに歩き回っていた。おなかがすいているのかもしれない。で、ハタと思い出した。機内食の残り物のロールパンとチキンをこの子にやったらどうか？「いいのかな？」という気持ちもありためらいながら少しずつ千切ってやってみた。犬の方もちょっとためらっていたが食べた。そして「もっとくれないかな？」という顔をした。ブータンの犬はととても遠慮がちだ。あまり強くは迫ってこない。「残したってしょうがないよな。」私はのパンと肉を次々に与えてついカラになったので「もうないよ」と包みのホイルを振って見せた。でも犬は「もっとないの？」という目をしてしばらくわたしにくっついてた。しかしやがて諦めて行ってしまった。

私と犬の様子をベーカリーにお母さんらしい人と買い物に来ていたさっきの女の子がじっとしていたがその子はズボンの上にハーフ・キラをつけているようであった。

ちなみにキラには本来の、肩から足首までを覆うフル・キラと現代的に簡略された腰から下だけに巻いているハーフ・キラがある。正式なのはフル・キラ。小中学生、高校生の制服はフル・キラ。航空機内のキャビンアテンダントの制服はかなり洋服的に、タックを取ったりして活動的にデザインされたハーフ・キラである。上に着るものも本来はワンジュというブラウスと上着のテュゴに分かれているが、簡略化されたものはその二つが一緒になっている。つまりテュゴにその下にワンジュを着ているように見える襟と袖口をつけたもの。CAさんの制服はそれである。が、地上勤務の女性職員の制服はそこまで簡略化されていなかったような気がする。でも航空機内の男性職員の制服はどうだったっけ？はっきり思い出せない。あまり注意して見ていなかったのだ。パイロットは勿論洋服だし、地上勤務の人

たちは普通のゴだった。

日本では洋服はお金持ちの「きちんとした服」から始まった。ここでは庶民のラフな服から始まり、広まっている。百年前の日本では洋服はハイソの象徴でカッコよかったわけだが経済的な理由で庶民に広まるのに時間がかかった。ブータンでは洋服は楽で現代的でカッコいいもの。でもあまり種類がないのできちんとしたときにはゴやキラを着るしかないのだ。尤もブータンの人がスーツを誂えたとしても外国にでも行かない限り着る場所がないだろう。公の場所ではゴやキラを着るべしという決まりがあるそうだから。勿論外国人についてはその限りではない。

さて昼食を済ませた後、パロチュ（「チュ」は川。「水」の意味もある。）沿いの道をハに向かう。初めは窓の外の景色を楽しんでいたがそのうち車酔いしたらしく気分が悪くなる。休憩をしたりシートを倒して寝たりしながら行く。

4：20、ハのホテル「リスマ・リゾート」に到着。小雨が降っていたが傘は不要であった。食堂で紅茶とビスケットと米菓子をいただく。米菓子というのはポップライスだがむしろ干し飯という感じだ。特に味はついていない。まずいというわけではないが特別美味しいというほどでもない。口寂しい時につまむのにはいいだろう。食べすぎたり塩分を取りすぎたりする心配がない。

食堂の時計を見ると少し進んでいるらしく四時三十分過ぎである。あれ、四時半でいいの？と思う。五時半じゃなくて？ガイドさんに確認すると今四時半で間違いはないという。そうすると日本時間は七時半か？私のケータイの日本時間の表示は八時半になっている。現地時間の表示は四時半になっていて四時間差になっているのが変なのだが「四時半」の表示の方が間違っているのだと思っていた。本当は五時半なののだと思っていた。家に電話をして確認する。夫が出て日本は七時半だと言った。ついでに家の様子も聞いた。

日本とブータンの時差は三時間なのだがなぜかその時ケータイの表示が四時間差になっていた。その経過を説明すると、まずタイのバンコクに着いた時に二時間差の現地時間が表示された。次にブータン航空機が経由地のコルカタに着いた時に現地時間の表示が日本時間より三時間遅れになった。そしてブータンに着いたら更に一時間の時差が加えられたというわけである。変だな、と思ったが何かの間違いだろう、後でどこかで確認しようと思っていたのにホテルに着くまでそれを忘れていたということである。ちなみにこのケータイの変な表示は帰路バンコクに着いた時に二時間差に戻り、日本に到着した時には正しい日本時間の表示に戻っていた。



ホテルの中のレストラン



寝室

さてホテルの部屋に入る。大きなコテージがたくさん並んでいるうちの一つの棟だが私の泊まった部屋のある棟はロジが二つくっただけのような造りであった。二軒長屋という感じのテラスハウスである。それぞれに玄関があってリビングがあって広いバスルームがありバスタブもある。日本ではバスタブ付きは当たり前だが外国では高いホテルでもシャワーだけのこともある。最高級だ、この広さと間取りはいわゆるスイートルームである。日本だったら一泊二十万円くらいしそうだ。暖房もつけてあって暖かい。ハの標高は2600～2700mくらいだそうで、朝晩は寒いのだ。タイ航空機の中でドロドロに溶けてしまったチョコレートがまた固まってくれた。ブータン航空のランチボックスをまだ食べていなかったのだからそれと一緒に洗面所に置いておく。早朝の空腹時の食料に丁度良い。

体調はすっかり戻った。荷物を解き、キラに着替える。これを着て夕食に行くのだ。ムフフ・・・二度目にブータンに来た時に買ったものである。

八時ごろ夕食を終えて戻ってきてテレビをつけてみたら“Do you know your child?”をやっていた。以前にブータンに来た時にも見たことがある。十代前半くらいの子供とその親をスタジオに招いて司会者と対談をする番組である。今回の司会はマルシアによく似た女性だった。

いいね、日本でもやったら？と思う。レイアウトも可愛い。他の番組も楽しくなったなあ。英語でやっていることが多いしそうでないことも多いが言葉がわからなくても見ていて楽しい。ブータンの放送はインドとかのものよりもオリジナリティがあるし映像がわかりやすい。落ち着いて見ていられる。何度も再放送をやっている感じもあるが。

食堂に日本語のキャプションが入った写真パネルがあった。その日は周囲のお客は殆ど欧米人だったが日本人もよく来るそうである。

九時ごろからバスタブに湯をためて浸かる。お湯の出方は問題なし。町に二軒しかない田舎のホテルと思っていたがなかなかゴージャスで設備がきめ細やかである。そういえばトイレトペーパーが日本風だ。ホルダーも簡単なものだが日本のものと同じ形だ。タイの空港や欧米でよく見るものは日本のものとは大分形が違って使いにくいし紙質もそっけない。ブータンで使われているものはダブルの柔らかい吸湿性の良い紙だったりしてまるで日本のもののような。ただ紙幅は少し狭い。(日本のトイレトペーパーの幅はムダに広



いと言われているそうである。)日本人の息がかかっているということだろうか？

しかし部屋でケータイの充電をしようとしたらコンセントの穴がどのアダプターにも合わない。何で?・・・と思ったが合わないではなかった。ゆるゆるなだけだった。ゆるゆるだけど填まっていさえすれば使えるのだとわかった。

それからブータンのホテルの部屋にはよく瞬間湯沸かしポットが設置してある。私はそういうものはあまり使いつけていないので使うとびっくりする。すごいなあ!五秒でお湯が沸くよ。ティーバッグなども置いてあるのでお茶にする。機内食でついていた小さいスナック菓子の袋が高所で気圧が低いのでパンパンに膨らんでいたのを食べてしまうことにした。豆菓子だった。ちょっと満腹した。

空港に着いた時150ドルを交換したヌルタムを数えたら、明細には9128ヌルタムと書いてあったが50ヌルタム多く入っていた。儲けちゃったな。それで前から持っていたのと合わせて現在高は347ドルと9193ヌルタム。最後の日にガイドさんたちに渡すお礼用のものをもう取り分けておく。3000ヌルタムと20ドルずつを二枚の封筒それぞれに入れた。だから残りは3193ヌルタムと7ドル。あとの300ドルは未開封のパックになっているので出来るだけ使わずに持ち帰ろうと思う。ブータンではお土産代とチップ(義務ではない)ぐらいしか使うことがないのだ。あとの料金は全て支払い済みである。

4月30日(日)

テレビでトランプ大統領が何か喋って支持者の声援を得ていたけどあれは何だろう?ここではインドの放送が五局、中国の放送が一局入る。ブータンの放送は二局である。(BBSというのと第二BBSというのである。)

中国のドラマをやっていた。北京語の字幕がついていて音声は中国語だと思うが字幕とは違う。北京語とは違う言葉で喋っているということか?広東語とか?時代はちょっと古い。数十年前のものだ。面白い車椅子が出てきた。自分でハンドルを回して動かす。ヒロインの名前が「自然」(ツネン)と言うようだ。どこかの大学の話だ。1977年ごろの話らしい。何年か後に先生になった彼女と昔の恋人が再会するというストーリー。エンディングソングのところにはゾンカ語の字幕も出た。

他にどんな放送をやっていたかという朝六時から七時はひたすら偉いお坊さんの講話。その後しばらくは偉そうな方々の対談とか、方々のお寺やそこに参詣する人々や修行をしている若いお坊さんたちの様子を紹介している。それからニュース番組もある。どこかで火事があったとか、どこかでサッカーの試合をやったというようなことも言っていた。

それから育児に関する情報や保健に関することも。それから社会科学習的なアニメとか電化製品のコマーシャルとかBBS放送のテーマソングなどを流していた。他の国から入る放送はどうも内容がわかりにくいし(英語で喋っていても)面白くないのでブータンの番組ばかり見ていた。

ところで何故かはわからないが、ハのホテル「リスマリゾート」の部屋のテレビでは八局もの放送がはっきり映ったのにそのあとに泊ったパロの「カンクーリゾート」の部屋のテレビではブータンの放送だけがはっきり映り、他国の放送は全てジージーザーザーでダメであった。しかしそのホテルでも以前に泊った時にはそんなことはなく、タイのバンコクでの暴動の話とか天皇陛下がインドを訪問されたとかのニュースを見ていたのに不思議である。

朝八時から朝食をいただく。美味しかった。ナッツの入ったような炊き込みご飯やヒュンテという黒っぽい餃子のようなものがあった。これらはハ独特の料理らしい。困みにブータ正直ンやチベットには「モモ」という餃子があるが（生憎私はまだブータンにおいてそれを食べたことがない。日本の代々木上原にあるブータン料理店で食べたことはあるが）それとは全く違うものなのだそうである。

そのあと九時半集合のつもりで用意をしていたら九時十分にもならないうちにメイドさんが荷物を運びに来た。この日は午前中にお寺を三つ見学した。「ラカン・カルポ（白い寺）」「ラカン・ナクポ（黒い寺）」「カンツォ・ゴンパ」である。ラカン・カルポは大きい。大きな広場があり、広い階段があり、そこを昇るとお寺である。お祭りの際にはその広場でマスクダンスなどが催されその石段が観客席になるそうである。そしてそこから工事中の道？のようなガレ場を登るとラカン・ナクポという小さいお寺があった。



もう一つのお寺は車でかなり山道を登って行き、途中からは歩いて登らねばならないところにあった。お寺の一段下にちょっとした広い場所がありそこからハの町やその向こう側にある「リスマ（ミリブンスム）」と呼ばれる三連の山が見下ろせた。この三つの山はそう高くもなく特に何かがあるわけでもないが同じような形の山が三つ並んでいるというのが面白いのだ。実際この地方に生まれ育った人々にとってはこの三連の山は紛れもなく故郷のシンボルであろう。



高台から三連の山を見下ろす

見学したお寺がどうだったこうだったと私はあまり描写ができない。正直言ってブータンのお寺に興味があるわけではないのだ。しかしブータンではお寺以外に観光するものがあまりない。お寺に観光客を案内することがガイドさんたちの仕事の半分みたいなものである。しかし私はガイドさんがお寺の由緒について熱弁をふるっていても皆、右耳から左耳に通過させてしまうのだ。しかし私は旅全体の雰囲気や空気を楽しんでいる。山々や川や町や村や行き会う人たち、空や風や匂い、動物たちや植物たち、山道の長いドライブ・・・それらが私の心を虜にする。

リスマリゾートに戻って昼食をいただく。窓の外でエサをもらって食べている犬が見える。その犬、ぺたっと横座りをしている。半分寝ているような格好だ。その姿勢のままに食器からエサを食べている。え？犬ってあんなふうな格好で食事をするんだっけ？たまたまあの犬がそうしているだけなのか？年寄りで体力がないのだろうか、などと考える。



ブータンではこのような格好で寝ている犬が多い。

13:15にまた出発する。少し年かきのメイドさんが私に「さよなら」と言ってくれる。少しだけ知っている日本語という感じで。私も「タシ・デレ」と言う。これは「ごきげんよう」というか、英語の「フェアウェル」みたいな感じの言葉らしい。なんだかもうかなり長く旅をしているみたいな気がしてきた。

「ハ」ってもっと田舎かと思っていた。でも未舗装の道などはまだあるけど綺麗な街じゃないか。ブータンでスペインの北部あたりとよく似ていると私は思った。建物がブータン建築だからブータンにしか見えないわけだが家々をスペイン風のものに、お寺を教会に全交換したらもろにスペインだ。自然の風景が似ているのである。でもしばらく考えたのち一つだけヨーロッパにはあるがブータンにはない、というものに気が付いた。それは「深さのある川」である。ブータン、といってもインドにごく近い南部の方はわからないが、ブータンでは平地が少ないので川はみな溪流のように浅く流れている。川幅はそれなりにあっても深くはない。大雨が降って増水した時以外はチョロチョロと流れている。

美しいハの町と別れ、今度はチェレ・ラという高い峠を越えてパロに戻る。昨日は車酔いをしたりしたが今日は平気だ。身体が慣れてきたのだ。パロは標高2400mほどらしいがそれでも飛行機でいきなり来ると高度障害が出るようだ。低いところから自分の足なり陸上の交通手段なりで登ってくれば問題はないのだが。昨日はちょっとした階段を昇るのも息が切れた。

チェレ・ラは標高3988mだということである。富士山頂より高く、殆ど4000mということになるが車で行くだけなら呼吸に全く問題は生じなかった。そこで歩き回ったらだめだったろうが。そこにはインド人のライダーたちが大勢バイクで来ていた。彼らにちょっとどいていただいて標識と並んだ写真を撮ってもらった。風がとても強かった。



チェレ・ラの山頂にて

チェレ・ラに着いたのが13:50ごろ。写真を撮っただけでまたすぐに出発する。そしてなんと一時間ほどで標高差1500mを駆け下りパロの町に戻ってきた。そして町はずれにある西岡 Cholten という記念碑を見学する。これは1960年代から三十年間もブータンで農業指導のために働いた西岡京治氏を祀る仏塔である。彼は惜しくも1992年に五十九歳で亡くなったがブータンで外国人としてただ一人「ダショー」という荣誉ある称号を授けられた。



西岡チヨルテン



ブータンの農業指導に尽力した西岡氏の功績が日本語で

そしてまだ15:15ごろで、時間が早かったので翌日行く予定だったパロ・ゾンの見学をしておしまおうということになる。でも私はそろそろトイレに行きたかったのでそう言うと、今晚泊まる予定のホテル、カンクー・リゾートに行きロビーのトイレに案内してくれた。

そしてパロ・ゾンに向かう。「ゾン」というのは日本の奈良時代に各地方に作られた「国分寺」にあたるものと「国府」または現在の県庁が一緒になったようなものでブータン各県にある。今日は日曜日なので「県庁」の部分は休みだがお寺の部分の見学はできた。お寺といっても城のような雰囲気もあり、敷地の中の長い坂道を登って行くのはとても疲れた。私は午前中は元気でも午後になると疲れが出てくるようだ。だから私は内心「もう見学はいいよ」という感じだったが旅行会社やガイドさんはとても誠実で、お客がお金と時間を費やただけしっかりモトが取れるように無駄なくスケジュールを組んでくれようとしているらしい。

ようやくパロ・ゾンの見学を終え帰りの車に乗り込んだ時、ガイドのカルマさんが少し離れた所で知人らしい他のガイドさんたちと話をしていた。その様子を見ていた私はその相手の一人が五年前にお世話になった運転手さんに似ていると思い、戻ってきたカルマさんにそう言った。すると彼は

「そう、あの人は同じ会社で働いている運転手、ゲンボーさんだ。」

と言った。そう！思い出した。そういう名前だった。まさにその人だったのだ。ついでに私は今までにお世話になった他のガイドさんや運転手さんたちのことも話題にしたかったがちょっと名前が思い出せなかったのでやめておいた。

16:50、カンクーリゾートに到着。紅茶をいただいた後部屋に入る。いつもと同様の

山の斜面に立ち並ぶコテージの一つである。ブータンのホテルにコテージ式が多いのは多分の方が建設しやすいからだろう。地形や建材や強度などの関係で。ティンプーには四階建てのホテルはあったがエレベーターは見なかった。それ以上高い建物をエレベーターなしで作るわけにもいくまい。ブータンは水力発電に力を入れてインドに電気を売ったりしているが自国の電力消費はつましくしているのだろう。私はまだブータンでエレベーターやエスカレーターは見たことがない。

夕食前にお風呂をすます。テレビを見るがここでは何故かブータンの放送しかまともに入らなかった。チャンネルもハのホテルの時とは違ってBBSが⑦、第二BBSが⑨だった。(ハでは①と②だった。)

またキラを着てみるが今晚はどうも着付けがうまくいかない。どれだけ直しても上半身部分がぐずぐずになる。それでとうとう適当なところで妥協する。上着を着てしまえばわからないものね。でも食堂では私のキラが注目を浴びて恥ずかしかった。前夜のホテルではあと二組ぐらいしか宿泊客がいなかったがここでは大勢いたのだ。

小雨がぱらつき食堂から部屋に戻る時雨が強まる。テレビの天気予報で「明日の前半は雨」と言っている。ほんとかな？何だかそんなことあるもんか、という気がするのだ。降ったってまあいいけど。ザックのカバーもあるし。

奥歯のかぶせ物がまた一つ取れてしまった！

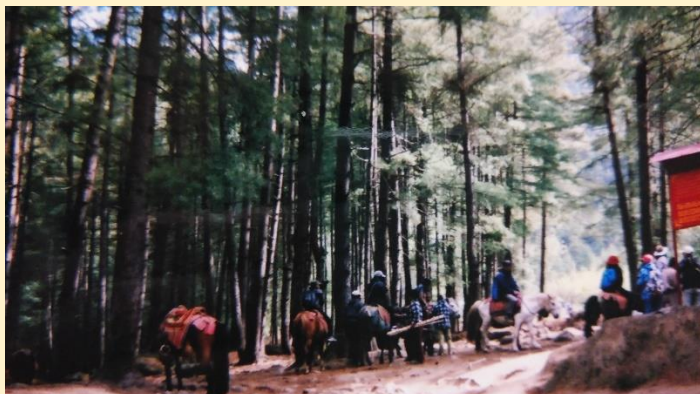
5月1日(月)

四時半に起きてインスタントコーヒーを飲む。雨は・・・？そんな音は聞こえない。小鳥の声がしきりに聞こえる。外に出てみる。降ってないじゃないか！イエイ！我こそは晴れ女なり。

辞書を引きながらブータン航空の機内で貰ってきた「タシ・デレ」という雑誌を読む。

朝食時。コックさんが目の前でフライドエッグを焼いてくれる。見ると一人に卵三個あてである。多すぎる！一個だけで焼いて下さいとお願いして作ってもらった。

さて今日は懸案のタクツァン僧院詣である。2400mのパロの町のはずれから3100mの高さまで登る。まあ一般観光客の登るハイキングコースだから大した登山ではない。日本にもこの程度の日帰りハイキングコースは数限りなくある。ただ少々標高が高い。そして山に登ったことのない人にとってはよく整備されているとはいえこれだけ坂道が続くのは辛いだろう。馬を利用する人たちがかなりいて、登山口には十頭ぐらいの馬と馬方さんたちがスタンバイしていた。



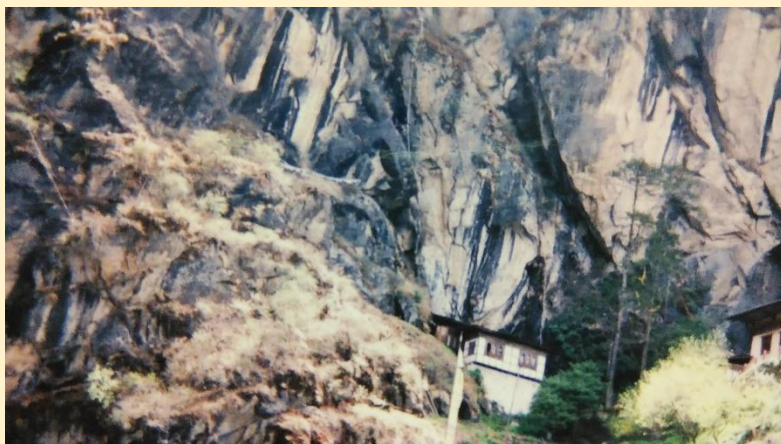
登山口でスタンバイする馬たち

しかし私は五年前に少し手前まで登ったので様子がわかっていた。五年前になぜ途中で引き返したのかというと、その時はこのハイキングを少々なめてかかっていたのでよく足に馴染んでいない靴を履いてきてしまったため踵に靴擦れができてしまったからである。しかし今度は大丈夫、空も快晴だ。暑いのはあまり嬉しくないが幸先は良い。

八時半にホテルを出発する。登山口に到着してカルマ氏と一緒に登り始めるとそこらへんに馬が沢山いるのを見る。十頭なんてものではない。七頭～十頭くらいのグループの馬たちがそれぞれお客を乗せ列を作って登って行く。徒歩で昇り降りしている人たちは馬が来たら安全のために道を譲る。登る間に道を譲った馬集団は五つか六つあった。それから上でお客を降ろしたのちに下山してくる馬集団もある。それらにも五つか六つ行き会った。

下る馬たちは早く帰りたくて駆け足になりがちである。「危険だから山側に避けて下さい。」と言われて注意していたが、運悪くその馬の一头がすれ違いざまに尾を振り回しカルマ氏はその尻尾で左太ももをひっぱたかれてしまった。かなり痛そうだったが彼は頑張っちゃんとその後の任務も果たした。

十時ごろから十五分くらい2800m地点にある休憩所で休む。ここではお茶や食事もいただける。もちろん有料だが料金の支払いは皆ガイドさんがやってくれるので何がいくらなのか私にはわからない。



このような岸壁に目を見張る

十二時過ぎ、順調にタクツァン僧院に到着する。その直前に深く下ってまた登る六百段とやらの階段がありちょっと緊張して臨んだのだがどうということはない。確かに急峻だが非常に良く整備されていて手すりにつかまりながら行けばいいので危険なことは何もない。しかしこういう場所の経験のない人々にとっては恐怖のようで足がなかなか踏み出せないような人たちもいた。欧米人や中国人の観光客が多かった。欧米人のツアーらしい人たちもいてスペイン語が聞こえた。日本人らしい人は私の他には見かけなかった。

お寺の中を見学する際には荷物、帽子携帯などはロッカーのある検問所のようなところで全て預けていかないといけないのであった。そこでは警察官立ち合いのセキュリティチェックもあった。



タクツァン僧院手前の登山道から。ここから一度急降下してまた急上昇する。

いつものことであるが私にはお寺そのものについての描写はできない。でもその周辺の岩壁や落差百メートル以上ありそうな垂直の大滝や山の樹々の眺めや長い急階段やその前後の山道を楽しみ尽くした。そしてお寺を見学したあとはすぐに下る。そして13:00過ぎに先ほどの休憩所で昼食をいただく。しかし同じ道を引き返してきたのに何だか下りの方が道が長く感じられた。別に足が痛くなったとか疲れたとかの感じはなかったのだが。

15:00、ホテルに戻る。この後夕方までまだ時間があるのでどこかを見学するかという話が出るが、私はもういいですと言った。これ以上歩き回りたいほどの余力はなかった。で、それじゃやめようということになった。カルマ氏だって疲れているはずだ。馬に足をひっぱたかれたということもあるし。

しかし夜の予定が変わっていた。ホテルは予定通りにカンクーリゾートにもう一泊するのだが、夕食はホテルで食べるのではなくある農家にお邪魔してそこでいただくのだと言う。そして良かったらドツォ（ブータンの伝統的なお風呂）にも入れるという。えっ?! 私は一瞬たじろいだ。農家とはまさか五年前に初めて来たときに一泊お世話になったあのお宅のことではあるまいか?そしてドツォ?・・・うーん、あれはご遠慮したい。それは昔々の日本の田舎にもあったような物置のような小屋のなかにしつらえられた木製の長方形の箱型



のお風呂で、沸かし方としてはまず先にその木製の湯船に水を張りその中に焼いた石を放り込むのだという。そのお風呂に入れていただいたのだが私はどうも落ち着かなかった。

湯船の底には砂も入っていたし小屋の中は真っ暗だしあまりにワイルドすぎて一度体験したらもう結構という感じだった。二度も入りたいとは思わない。私はドツォには入らなくていいとお断りした。しかし農家訪問のことまで断るわけにはいかなかった。多分前と同じ場所だ。懐かしいと言えば懐かしいのだがちょっと気恥ずかしくもあるし、一所懸命おもてなしをしてくれるあそこのお爺さんがちょっと苦手でもあった。が、仕方がない。

六時に出発ということになりそれまで部屋で休む。そのころから雨が降ってきて雷も鳴り始めた。夜の外出、大丈夫かね？部屋に備え付けの設備と材料でミルクティーを作り二杯飲む。疲れていたの一杯じゃ足りなかった。家から持ってきたじゃがりこも開ける。そうしているとちょっと雨が止んだ。夫にメールをした後ベッドに潜り込み、テレビを観ながら、窓の外も眺めながら贅沢な二時間を過ごす。ベッドの横の大きな窓から正面の小山とその中腹に動かずにいつまでも漂っている白い雲、全く飽きることのない眺めであった。

夕方六時、ホテルを出発する。小雨がパラついていていた。農家を訪問する前にパロの町を散策するがこれも正直なところどうでもよかった。だって買いたい物って何もないもの。

しかしたびたびブータンを訪れてそのたびに思うのだが町の様子が年々変化している。首都のティンプーもそうだし田舎町だったハも年々垢ぬけてきたのだろう。パロもそうだ。お洒落なお店が随分増えている。でも建物の建築様式は皆同じブータン建築だし店の看板のデザインも決まっている。きっと都市計画のようなものがあって統一するようになっているのだろう。店の中の商品も増えた。良いものが沢山ある。でも私には買いたいものがない。なぜなら私は必要な物は何でも持っている。ただ「記念に」といって物を買っても置いておく場所も入れておく場所もない。日本人は「断捨離」が至上命題なのだ。誰かにお土産としてあげても同様の理由で迷惑かもしれない。相手の好みもあることだし。私はお義理で一軒の店を覗いてみただけであとはどこへも寄らなかった。そしてすぐ車は再出発した。

訪れた農家というのはやはり五年前にもお邪魔したお宅であった。戸主のお爺さん（当時は七十五歳といていた）とお婆さんとご次男夫婦と子供が二人とご長男のお子さんだという子供が一人、当時はいた。そしてその日訪れたらまず庭先でお嫁さんと対面した。五年前にお邪魔したことを覚えていると言って下さった。ご主人はたまたまであろう、ご不在だった。それから五歳だった男の子が十歳になり、三歳だった女の子が八歳になっていた。彼らは私のことは覚えていないようだった。お婆さんは亡くなられたのであろうか、もういなかった。ご長男（事情があって他のところにいると言っていた）の息子さん（五年前には八歳だった）はもう同居していないいらしかったがそのことを尋ねても語学力が不十分だったせいかよくわからなかった。



これは2012年の写真。後列左橋が「お爺さん」である。

家の中に入ると先客の方々がいた。この家は旅行会社から依頼を受けてホームステイや民家の体験をする観光客を多数引き受けているらしい。でもその時部屋の中にいた見知らぬ男性は民族衣装のゴを着ていたので私は「グズサンポーラ」（こんにちは、の意味）とゾンカ語で挨拶してしまった。すると相手は「いや、日本人です。」と日本語で言った。私たちより一足先に来て夕食をご馳走になっていたらしかった。

そばにキラを着た美しい若い女性がいる。その男性の奥さんとかには見えない。いや、そもそも旅行者には見えない。近所の人かこの家の親戚の人だろうか？と思って「そちらのお嬢さんは？」と尋ねるとなんとガイドさんだという。まあ、びっくり！！確かにこのごろは女性のガイドさんも多くなったようで十人に一人くらいの割合でいるようだがとても綺麗なキラを着ていてまだ二十歳くらいに見える人だったので私は内心この四十歳くらいの男性に対して「まあ、ラッキーだったわね。」と思った。彼は三重県から来たということで一人旅、日本語のわかるガイドさんを、とお願ひしたらたまたま彼女が担当になったということだった。とても朴訥な感じの男性だったが私は自分と同じような旅をしているその人と出会ってお喋りをして、それがその晩の一番楽しかったことであった。

一所懸命おもてなしをして下さったその家の八十歳のお爺さんには申し訳ないのだが、そちらの方は気詰まりでならなかった。まず前にもそうだったのだが飲食物が難しい。まず出して下さるバター茶は飲めないことはないのだが沢山飲むのは辛い。減ると継ぎ足してくれるので私は途中から飲むのをやめてコップの中身を減らさないようにした。それから料理は日本人にとっては皆激辛である。ホテルで出されるものは外国人用に配慮してあるが民家では激辛が当たり前なのでどんなに気を使ったつもりでもやはり日本人にとっては辛すぎるものを作ってしまいうわけである。小さい子供たちでも平気で食べているのであるが、私は以前頑張って辛い物を食べて下痢をしたり胃を悪くしたりした経験があるのでいい恰好ばかりしているわけにはいかない。「もう食べきれません」というしかなかった。「日本人の口には合わないのか」とお爺さんはがっかりした様子をしていた。

「ブータンのお金、持っていますか？」とカルマ氏が私に尋ねた。

「お爺さんにお礼を渡してください。帰り際に。チップのようなものです。一般的な習慣です。500ヌルタム（1000円くらい）でいいでしょう。」

ということで私は帰り際に

「有難うございました。お世話になりました。」

とお金を渡した。むき出しでかまわないそうである。

八時過ぎにおいとました。この家の敷地に入る時、細い山道のようなところを少し登ったので「暗くなってからここを降りるんですかあ？」と不安になったのだがお爺さんとカルマさんが懐中電灯で足元を照らして私を車のところまで誘導して下さった。そこからホテルに戻るまで車で二十分くらいだった。

初めてブータンの夜道を車で走り大変驚いたことがあった。それはパロの町の夜景であり。そこは決して日本や欧米にあるような大都会ではない。しかしその夜景は何とも言えずすばらしかった。パロ・ゾンの大きな建物がライトアップされていてそれはとても目立つのだが、むしろそれよりもその周囲の町の灯りの散らばる様子がまるで星の海のように……。特に山、町の傍にある低い山々だがその斜面に散らばる大きな星のような光の数々。どうしてあんなに瞬いているのだろうか？他の町の、大きな町の夜景と何かが違う。でも何が違うのかわからない。あれらは街灯なのだろうか？マイナス三等星くらいの大きな星が天の川のように沢山集まって瞬いているようであった。照明の種類が他のところのと違うのだろうか？不思議で仕方がなかったがガイドさんたちに尋ねてみたとしても彼らはブータンの夜景しか見たことがないだろうから何が違うとははわかるまいと思い、何も尋ねなかった。でもあれは感動だった。私は日本で皆がどこそこの夜景だのライトアップだのと夢中になっている様子を見ても全然興味がわかなかつたのだがそれでもあの時の夜景には感動した。

さてホテルに戻り部屋に戻ってお風呂に入る。やっぱりドツォよりもホテルのバス、シャワーの方が良い。

5月2日（火）

四時半ごろ起きいつものようにコーヒーなどを楽しむ。そして残ったヌルタムはどうしようかと考える。お土産を沢山買う予定はない。荷物は全部機内持ち込みにするので物を増やしたくはないし、もう何度も来ているので買わなければならないものは殆どないはずだ。それで残っている2686ヌルタムのうちの686ヌルタムはチップとして部屋に置いていくことにする。ドルに換えて、また円に換えてなどで目減りするよりはいい。そしてまた今朝も辞書を引きながら「タシ・デレ」を読む。

朝食に行く。昨日もそうだったが私は一人で小さい丸テーブル。隣の大きいテーブルは中国人の女性ばかりのグループだった。本当に中国人が多くなったなあ。以前に来た時にも中

国人はいたことはいたがそんなに多い感じではなかった。そしてその中の一人がハーフキラに洋服の上着、といういで立ちだった。そうか、その手があったか。それならそんなに目立たずにキラを着られる。



ホテル、カンクーリゾートの玄関



ホテルの中庭

九時ごろ出発した。空港は目と鼻の先である。フライトは十一時。でもカルマ氏がなかなか車に乗ってこなかった。何かを探している様子であった。何かが見つからないのかと運転手さんに尋ねるとガイドのライセンスが見つからないのだと言っていた。それでもやっと出発する。大丈夫だったのだろうか？

空港で。残金は丁度300ドルと2000ヌルタムであった。できればヌルタムはここで使ってしまいたかった。全ての手続きが済んで搭乗を待つだけになってからリンゴジュースを一本買った。これは私がいつもブータン旅行の記念に買うことにしているものである。ブータンの数少ない工業製品といってよい。250mlの小さいペットボトルに入っている。このボトルの空になったのを記念に持ち帰り、つぎに来訪できる時までお守りとして保存するのだ。水筒がわりにして、でも水しか入れないようにして出来るだけ綺麗に使っても二年くらいたつと内部にカビが生えてきたりするがハイターなどの薬剤で洗浄すれば綺麗になる。そしてまたブータンに行く機会があればまた新しいのを買う。このジュースが50ヌルタムであった。

そのあと新しく空港内にできたショップで土産物を物色していると乾燥松茸というものを見つけた。「まつたけ」と平仮名で表記してあるところを見ると明らかに日本人をターゲットにした商品だ。ブータンでは松茸がよく採れるのでその季節になると日本人の観光客が喜んで買っていくと聞いていた。私が五年前の八月に来た時にはちょうどその季節だったらしく帰りの機内で松茸の箱を持っている人たちを何人か見た。しかし私はリンゴにしる松茸にしる生の植物を持ち出すのは面倒なのではないかと思っていた。でも乾燥物があったとは！日本の物と同じ味かどうかはわからないが是非試してみたい。それなりの価格（30ドル）であったが買えない額ではない。私はそれを買うことにし、「ヌルタムで」と言うと店員さんは電卓で計算して「1950」と言った。おお！何とヌルタムの残金がこれで綺麗になくなった！

これで残金は丁度300ドル、使わずに持って帰ろうと思っていたが今頃になってはたと思い出した。私がこういう旅行の度に大変お世話になっている義姉と弟と妹に何か買って帰らねばならない。工芸品の類はもらっても邪魔かもしれないが口に入れられる物で何かないだろうか？と探したらあった！！インド製の紅茶が三種類売られていたので各種ひとつずつ買った。アールグレイとダージリンとジャスミンティー。300ドルパックの封を切り、27ドル使った。それから後でバンコクで飲料水を2ドルで買ったので羽田に着いた時の残金は271ドルであった。

搭乗すると乗客は半分くらい中国人の感じである。日本人は探せばたまにいる、という感じである。いつも私が行くようなところでは、でも私の座席の隣は欧米人のカップル。ああ、よかった。

乗って間もなくジュースが配られたが前の席の中国人のオッサンが急にシートを倒したので私のジュースが転んでしまった。小さい紙パックでストローが刺してあったのだが幸い零れずにすんだ。カップでなくてよかった！

機内食のランチはベジタブルライス（インディカ米のライスに野菜炒めをのせたようなもの）、ヨーグルト、コーンサラダ、ケワ・ダツィ（茹でたジャガイモに唐辛子風味のチーズを絡めたブータン料理）の殆ど辛くないものチョコ味のカップケーキとロールパン。あとオレンジジュースと紅茶。それからナッツの小袋。

搭乗口近くにブータンの経済新聞が置いてあったので頂いておく。（「クエンセル」という新聞が欲しかったのだが置いてなかった。日本で言えば朝日、読売、毎日みたいな新聞である。）「タシ・デレ」の往路の時と違うのが各席に備え付けてあったが荷物が増えるので機内で読むだけにして持ち出しはしなかった。

16:00過ぎに バンコク、スワンナプーム国際に到着。乗り換えは EAST だろうと思っていたのでそちらの方に行こうとしたら親切な係員の方が気づいて WEST の方だと教えて下さる。

出発案内のボードに自分の乗る便についての表示が出てくる18:00過ぎまで待つからセキュリティチェックに行く。次にタイ航空のカウンターで搭乗券を貰う。窓際の席になる。それから搭乗ゲートを確認。これで搭乗の準備は完了。

しかしそのあとが長い。小さいカフェテリアみたいな店で600ml入りの水を買う。それからさっきの機内食の残りを食べる。搭乗者のためのフロアはとても広いので時間があつたら歩き回ったっていいのだが疲れているのであまり動きたくない。それにもう朝から十時間以上も立っているか歩いているか腰かけているかだった。足を伸ばせないのがとても辛い。できれば横になりたいくらいだ。でも幸い椅子はあちこちに沢山あり自分の周囲に殆ど人がいないことが多かったので隣の席に足をのせたりもしてみた。そうそう行儀よくしてばかりもいられない。エコノミークラス症候群にでもなったら大変だ。そして時々他の

場所に移動してみたりもした。

そうしているうちに良いものを見つけた。寝椅子のようなものが沢山並んでいる区域を見つけたのだ。実は前に来た時にも空港はここだったかもしれないが別の場所でそういう物を見たことがある。しかしその時はその場所は殆どむくつけきアラブ系のような大柄な男性たちに占領されていて近寄れなかった。しかし今回はとても空いていた上に若い女性も利用していたので私も有難く使わせていただくことにした。そしてそこで三十分ほど休んで早めに搭乗ゲートの近くに移動した。

22:30過ぎ、やっとタイ航空機に乗り込み窓際の席でぼーっとしていたら眠ってしまったらしい。離陸の時の記憶がなく気が付いたらもう空を飛んでいた。飲み物のサービスが回ってきて私は慌ててオレンジジュースをセレクトした。そしてふと気が付くと隣の席の女性のテーブルの上にサンドイッチがある。あれ？まさか...私が深夜便に乗る時にいつも楽しみにしている夜食のサンドイッチ...ひょっとして私はそれが配られた時に爆睡してもらいそこねたのではないだろうか？え～、そんなのアリか？！他の席については見えなかったのではなかった。私は座高が高くないのでちょっと穴にはまったような感じになってしまうのである。しかし「それ、配られたんですか？」と聞くのも恥ずかしかった。しかも隣の女性はそれを食べたくなかったらしく飲料のカップの回収が回ってきたときにそれを返していた。え～、それ私に下さい、とは勿論言えなかった。

私が寝ていたのだったらちょっと声をかけてくれたらよかったのに、と思ったがその女性は外国人らしかった。ああ、そこまで他人に期待するのは無理だろう。私はその時初めて「ああ、連れがいたらよかったのに！」と思った。(そのほかの時には全くそんなことは思わないのだ。) ああ、サンドイッチ・・・食べ損ねた悔しさと私は今夜眠れないかも、と思った。でもそれほどでもなかった。後半かなり速く時間が経過したので少しは眠ったということであろう。

5月3日(水)

午前三時半ごろの朝食には焼うどんが出た。まあまあ食べやすい味だった。お腹もすいていたし。でも機内食というのは何でも具が多い。日本国内だと安い食事だと具が申し訳程度にしか入っていないことが多いがこの焼きそばにはエビやイカが沢山入っていた。エールフランス機内でビーフシチューやカレーライスが出た時にもうんざりするほど具が多かった。でもそういうのって町のレストランで食事をするときならいいが、機内では胃にも疲れが出てきているので重すぎるのだ。私が日本人で年寄りだからそう思うのかもしれないが。

羽田には6:55の到着予定だったが着陸したのが6:30、機外に出たのが6:40、それから長い長い通路を歩いてようやくパスポートチェックなどを済ませて到着ロビーに出たのが7:05。それから目の前のチケット売り場で大宮行きのバスの切符を買って、そ

れから外貨交換所に行って持ち帰ったドルを全部円に戻す。それからコンビニで飲み物を買って、急いで下に降りてバス乗り場に駆けつけるともう7:28だった。バスは7:30に発車。8:40に大宮駅に着く。

ニューシャトル乗り場まで急いでみたが50分発には乗れず、9:00発のに乗って9:03に鉄道博物館駅に着。家に着いたのが9:10という次第であった。

帰宅すると「昨日義父が入院した」と知らされた。九十四歳。心臓にペースメーカーをつけているのだが肺炎と心不全を起こしたようである。義父母を中心とした我が家の波乱万丈は2012年からずっと続き今に至っている。それでも、というよりそれだからこそ私は年に一度頑張って旅に出る。そのうち義父母がいなくなったら楽になるか・・・？さあ、それはどうだろう。夫や義姉が気落ちしてしまって留守番ができなくなってしまわないとも限らないのだ。だから私は遠慮ばかりしない。やりたいことは多少無理をしてもできる時にやっておく。私が何の遠慮もなく好きなように生きられる日などもしかしたら一生来ないかもしれないのだ。

書き忘れたことがある。往路ブータンのパロ空港に到着したとき建物に入る前に近くに建てられていた大きなパネルに驚かされた。国王。王妃両陛下と昨年の二月五日にお生まれになった王子様の御居間でくつろいでいらっしゃるお姿の写真が掲げられていた。当然私はそのパネルを写真に収めた。



冒頭でもお見せした写真です。

【完】